# お茶の水女子大学の課題
# —平成 22 年度「お茶大生の学習環境と生活・意識に関する調査」報告

中島ゆり
お茶の水女子大学 総合学修支援センター

# The challenge ahead in Ochanomizu University: Overview of student survey on college life and learning environment in 2010

Yuri NAKAJIMA
Ochanomizu University Learning Support Center

This paper aims to overview the findings of the 2010 student survey in Ochanomizu University and point out challenges that lie ahead. The participants were all undergraduate and graduate students. It was conducted in December 2010 by Center for Research and Development of Education, Ochanomizu University. This paper looks at the students' college life, learning, career perspective, job search, study abroad, education environment, university supports, and evaluation on university and faculty. I finally point out five future tasks in Ochanomizu University: 1) the enhancement of career supports, 2) the support for mastering a foreign language and studying abroad, 3) the continual reexamination of curricula, 4) the improvement of libraries, classrooms, PC and web environment, locker rooms, student rooms, and administrative supports, and 5) the support for students' voluntary study and students' life.

**keywords** : student survey, higher education, faculty development (FD)

## はじめに

2010（平成 22）年 12 月、お茶の水女子大学において「平成 22 年度お茶大生の学習環境と生活・意識に関する調査」が実施された [*1]。この調査は、お茶の水女子大学に在籍する全学部生、大学院学生を対象とした悉皆調査である。調査の目的は、学生がお茶の水女子大学の教育、入試、学生支援、情報環境、国際交流などについてどのように評価し、どのような意見やニーズをもっているかを調べ、お茶の水女子大学の教育、研究、福利厚生等の改善を図る上での基礎的資料を得ることである。調査は同調査初のウェブ調査であり、教育開発センターが Plone（オープンソースの Contents Management System）を用いて実施した [*2]。回収率は学部生（2124 人）で 45.7%、博士前期課程学生（543 人）で 47.9%、博士後期課程学生（474 人）で 30.2%であった。

本稿では本調査結果をまとめた「平成 22 年度お茶大生の学習環境と生活・意識に関する調査」報告書をもとに、調査結果について概観し、お茶の水女子大学の今後の課題について考察する [*3]。この際、2007 年に実施された全国大学生調査コンソーシアム / 東京大学大学経営・政策研究センター「全国大学生調査」（全国 48,233 人対象、以下「全国大学生調査」と呼ぶ）、2008 年の京都大学国際交流センター「国際交流と留学支援制度に関する調査」、ベネッセ教育研究開発センターが実施した「2008 年大学生の学習・生活実態調査」（以下「ベネッセ調査」と呼ぶ）の結果を適宜、参照する。

## 大学生活に対する考え方と実際の生活

まず、お茶の水女子大学生の大学生活に対する考え方と実際の日常生活を見ていく。学生は大学生活をどのように考え、過ごしているだろうか。大学での学び方については、過半数が「授業は自分で好きなようにとりたい」、「授業の中で必要なことは全て扱ってほしい」、「専門以外のことも広く学びたい」と回答した。「授業の意義や必要性は自分で見出したい」学生は「授業の意義や必要性を教えてほしい」学生と数の上で拮

Copyright 2011. Ochanomizu University. All right reserved.

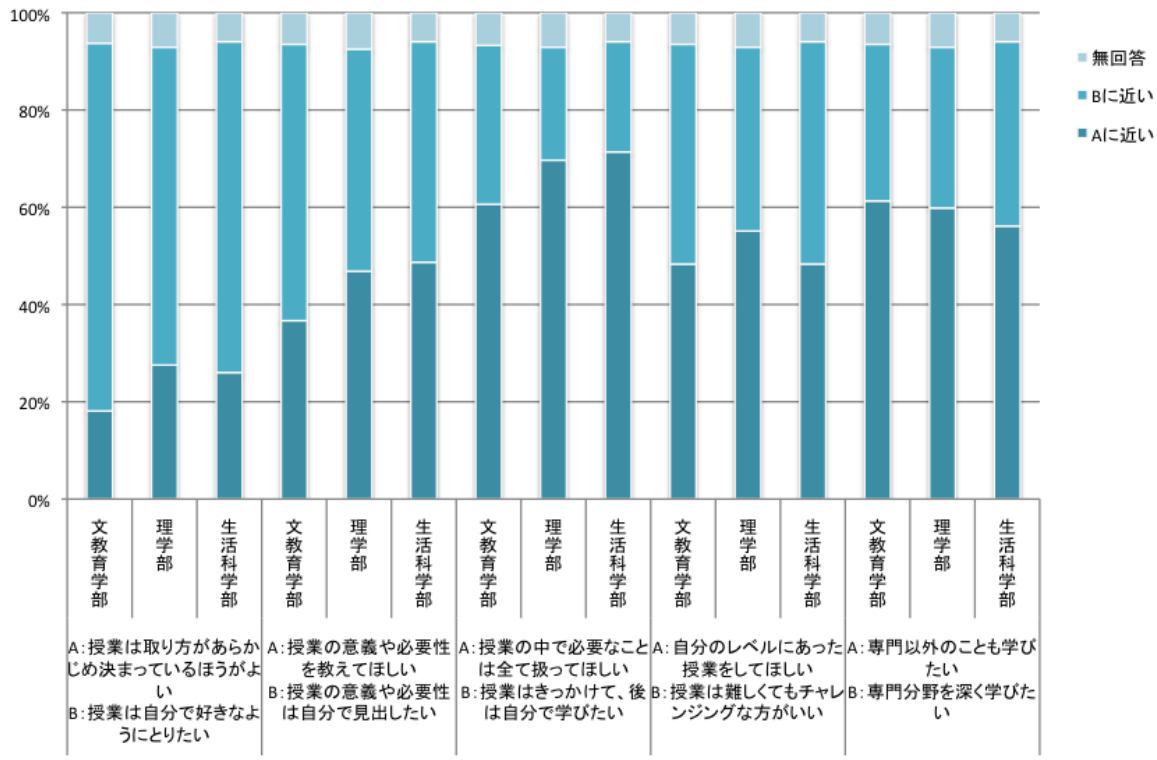


Figure1 大学での学び方についての考え方（学部）

抗しているが、前者は「全国大学生調査」とくらべるとその割合がかなり高く、とくに文教育学部と大学院では過半数の学生がそのように回答していた。同様に「自分のレベルにあった授業をして欲しい」学生と「授業は難しくてもチャレンジングな方がいい」学生の割合も同じ程度であったが、後者は「全国大学生調査」とくらべるとその割合がかなり高く、とくに文教育学部と生活科学部、大学院の学生では半数近かった。

以上のように、お茶の水女子大学の学生は専門に特化するよりも広く学びたいと考える学生が多く、型にはめられるよりも自由に履修し、授業の意義を自ら見出したいと考える学生が比較的多いようである。また、チャレンジングな授業を求める学生の割合も全国平均より多い。

つぎに、大学在学中に何を目標として大学生活を送っているのかを見よう。「将来の仕事に活かせる能力を身につける」、「資格試験・公務員試験などに合格する」については「全国大学生調査」くらべるとその割合が低く、「最も重要」または「重要」と回答した者はおよそ６割と 3.5 割であった。「専門分野の知識・理解を深める」、「広い教養、ものの見方を身につける」については「全国大学生調査」と同様にお茶の水女子大学の学生も９割以上が重要であると回答したが、「最も重要」の割合のみを見ると「全国大学生調査」よりも 10% ポイント高い結果となった。「自分の将来の方向をみつける」、「社会人になるまでの時間をエンジョイする」、「有意義な人間関係を築く」については「全国大学生調査」と同様の傾向が見られ、８～９割が重要であると回答した。お茶の水女子大学の学生は大学での勉強により関心があるようである。

それでは、授業外でどれくらい勉強しているだろうか。自宅、図書館、研究室など授業外で勉強している週あたりの平均時間は１年生で 6.1 時間、２年生で 7.0 時間、3 年生で 9.6 時間、4 年生 13.8 時間であった。これを学部別に見たのが Figure ２である。文教育学部では１、２年生のころは平均６時間程度であるが、3 年生になると 10.6 時間、4 年生になると 13.8 時間と増える。理学部は文教育学部よりも勉強時間が長く、とくに２年生で勉強時間が長いのが特徴的である。具体的には、1、３年生で７～８時間、２年生で 10.6 時間、４年生で 14.1 時間であった。勉強時間が比較的少ないのは生活科学部で、１、２年生では５時間程度、3 年生で 9.6 時間、4 年生で 13.5 時間であった。

１ヵ月の読書量については「全国大学生調査」とくらべるとやや多めではあるが、それほど多いというわけでもない。「全国大学生調査」では読まないと回答した者が 29.0％であったのに対し、お茶の水女子大学の学生は 15.6％と少なめである。読んでいる中では、１冊が 29.1％、２冊が 20.7％、3 冊が 10.7％、4 冊以上が 17.3％となっていた。「４冊以上」を「４

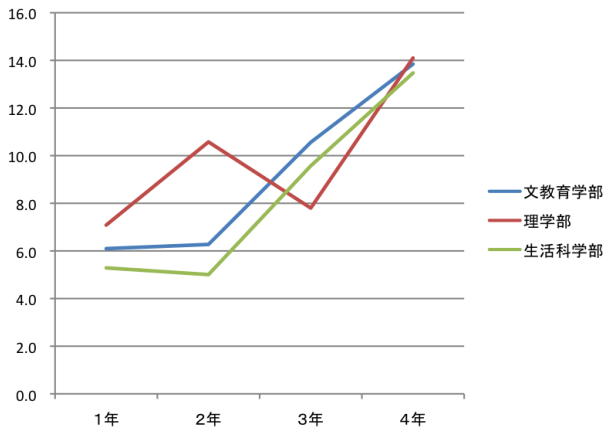


Figure 2 授業外で勉強している週あたりの平均時間（学部、学年別）

冊」と換算し平均値を学年別に見ると 4 年生で 2.0 冊と最も平均値が高く、1、2 年生で 1.7 冊、3 年生で 1.9 冊であった。学部別に見ると、文教育学部の平均が 2.0 冊なのに対し、生活科学部は 1.8 冊、理学部は 1.6 冊と少なめであった。

つぎに一週間の新聞講読回数（ウェブを除く）について見ると、それほど多くないことを示している。具体的には、「読まない」と回答した者は 44.1％で最も多く、毎日読む者は 14.5％、週に 1 ～ 2 日が 21.4％であった。学年別に見ると、「読まない」と回答した者は 1 年生では 49.1％と半数であったが、4 年生では 38.8％と学年を上がるにつれ減っている。就職活動の準備等で新聞を読む者が増えるのだと考えられる。学部別に見ると理学部で「読まない」と回答した者が 53.9％と多く、つぎに生活科学部の 43.1％、文教育学部の 39.1％の順であった。

## 進路と就職活動

つぎに進路と就職活動について見ていく。

お茶の水女子大学の学生は卒業後の進路をどのように考えているだろうか（Figure3）。調査時点（12 月）での希望を入学時の希望と比較してみると、文教育学部では民間企業が 32.4％→ 33.8％、公務員が 10.7％→ 18.3％、専門職が 11.9％→ 5.6％、進学希望が 20.8％→ 18.6％という変化をしており、公務員希望の割合が大学入学時と比べ高くなっている。理学部に関しては、民間企業が 17.3％→ 16.1％、公務員が 3.9％→ 4.3％、専門職が 11.4％→ 6.7％、進学希望が 51.2％→ 58.3％という変化であり、進学希望の割合が高くなっている。生活科学部については、民間企業が 26.8％→ 32.3％、公務員が 12.3％→ 12.6％、専門職が 11.5％→ 7.1％、進学希望が 24.9％→ 26.4％という変化をしており、民間企業希望の割合が高まっていた。

博士前期課程の学生の希望進路については、6 割以上が就職、2 割がお茶の水女子大学の博士後期課程への進学であった。

Figure 4 は大学卒業後の進路に向けた準備・活動

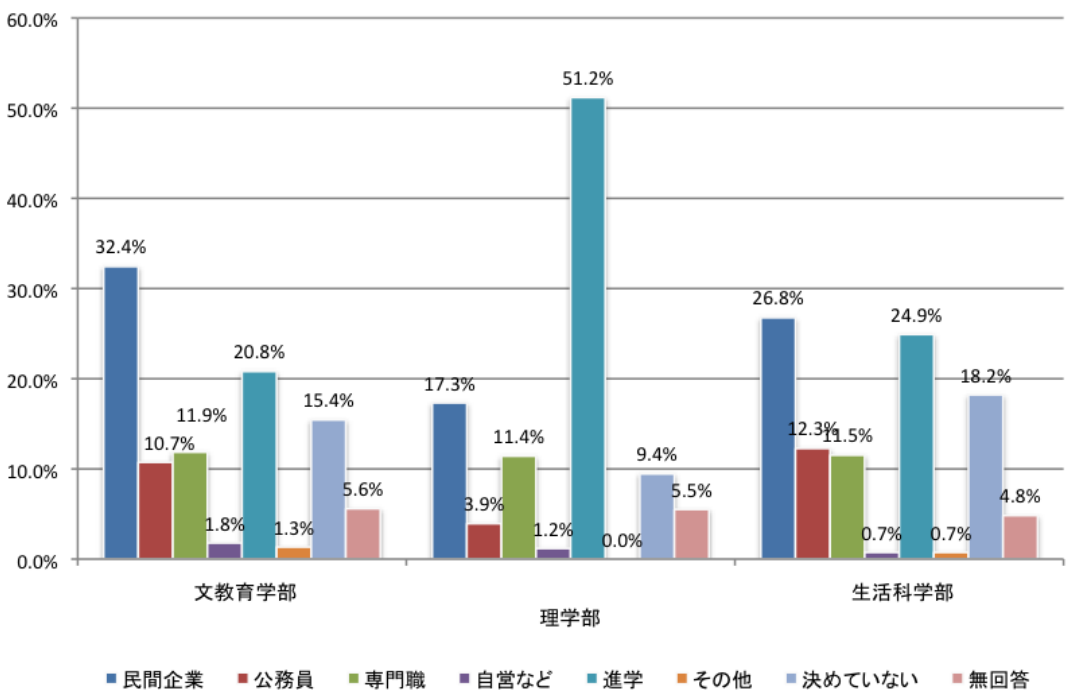


Figure 3 現在の進路・就職希望（学部別）

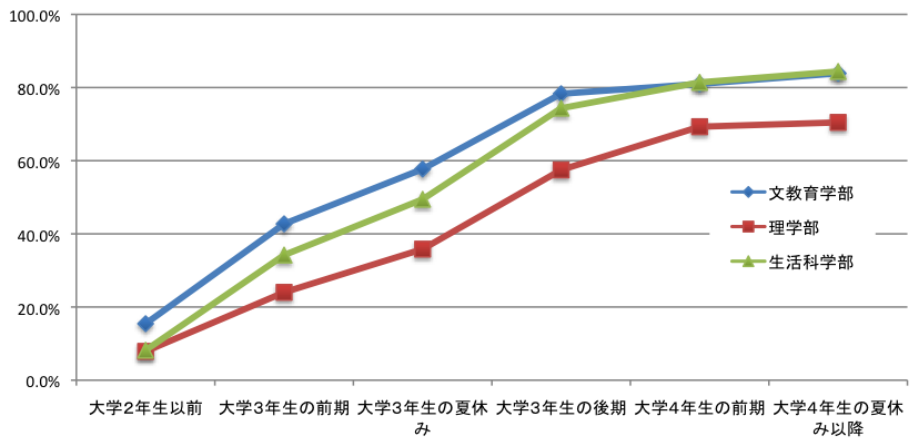


Figure 4 進路に向けた活動開始時期（学部別）（累積パーセント）

を始める予定時期あるいは始めた時期の累積パーセントを示したものである。就職活動の開始時期は文教育学部の学生が相対的に早く、大学４年生の前期に生活科学部が割合として追いつく形である。理学部については、学部段階では就職活動をしないつもりであると回答した者が 9.8％と高く、就職活動をしている比率が他学部に比べて低くなっている。その他、「わからない」と回答している者も全体平均で 8.7％いた。

つぎに、進路相談の相手について見たい。お茶の水女子大学には学生の進路をサポートするためのセンターや組織があるが、実際のところ学生は進路相談を誰にしているだろうか。いずれの学部、博士前期課程でも親・保証人に相談する割合が高く、このほか、文教育学部、生活科学部、博士前期課程では友人に相談する割合が高い。博士前期課程においては親・保証人よりも友人に相談する割合の方が高くなっている。キャリア支援センターに相談する割合は博士前期課程の学生で 15.8％、文教育学部で 10.5％と比較的高めであるが、理学部、生活科学部、博士後期課程では１割未満と低い。逆に、理学部の学生の 29.5％、博士後期課程の学生の 25.2％、生活科学部の 23.8％は進路相談をしたことがないと回答した。進路相談したことがない学生の割合が高い一方でキャリア支援センターの利用が少ないのは、大学内の相談できる場が十分、周知されていないためである可能性がある。

## 留学

近年、留学する日本人が減少していると言われるが、お茶の水女子大学の学生は留学についてどのように考えているだろうか。関心ある留学について聞いたところ、学部生平均では、海外留学（協定校：1 学年）33.5％、海外留学（協定校以外）20.7％、海外語学研修（1 年程度の長期）25.1％、海外語学研修（短期）40.8％、ワーキングホリデー 18.8％であり、留学をまったく希望していないと回答した者は 33.0％であった。一方、大学院生の平均は海外留学（協定校：1 学年）33.0％、海外留学（協定校以外）27.3％、海外語学研修（1 年程度の長期）26.8％、海外語学研修（短期）35.7％、ワーキングホリデー 17.1％であり、

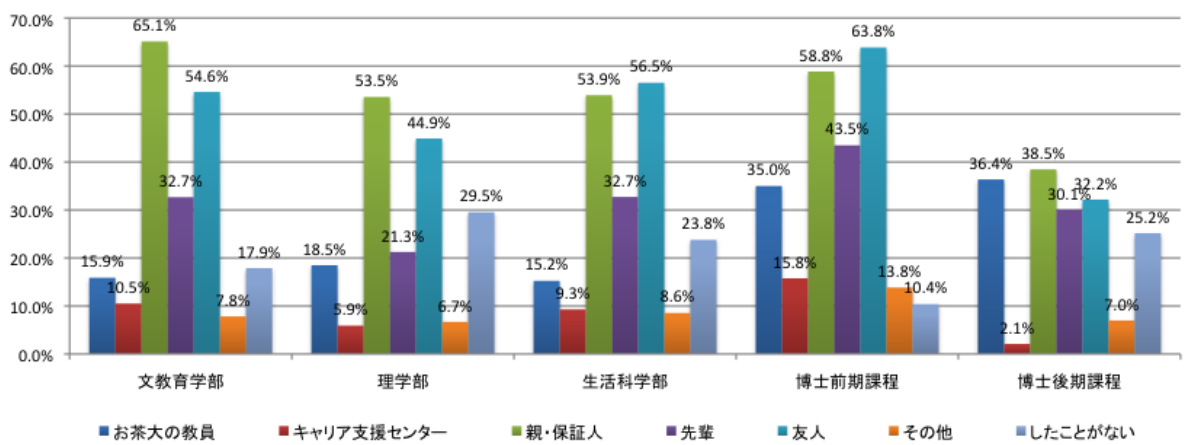


Figure 5 進路相談の相手（多項選択）

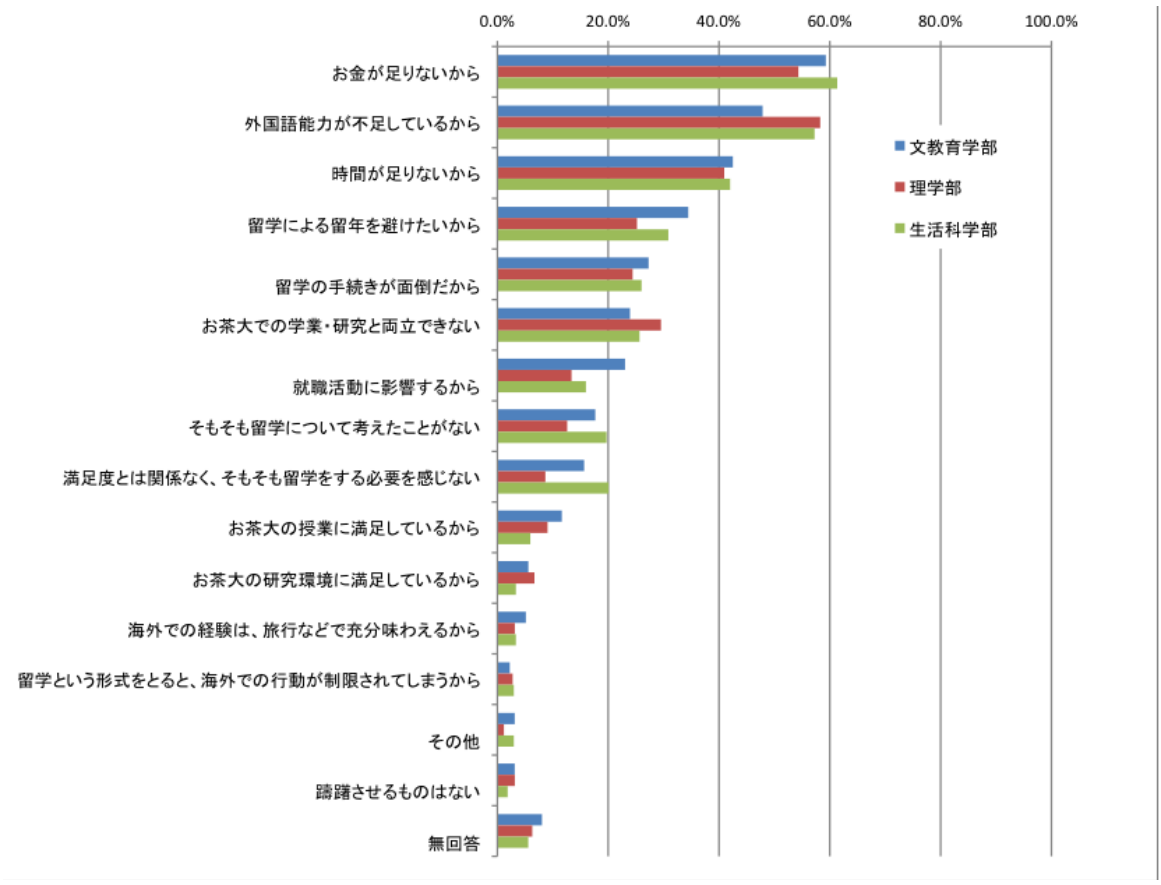


Figure 6 留学を躊躇させる要因（多項選択）（学部別）

留学をまったく希望していない者は 27.3％と学部生よりも低い割合であった。このように、７割近くの学生が何かしら留学に関心をもっているようである。

しかし、この傾向は学科によって異なる。たとえば、協定校への海外留学（1 学年）を選択した割合は化学科（40.8％）や情報科学科（39.4％）で高く、一方、協定校以外の海外留学を選択した割合は、芸術・表現行動学科（45.8％）で突出して高い。短期の海外語学研修については、化学科（59.2％）、情報科学科（48.5％）、人間・環境科学科（48.9％）でとくに高くなっていた。ワーキングホリデーに関しては、人間・環境科学科でのみ３割を超えた。一方、留学はまったく希望していない者は芸術・表現行動学科（18.8％）、化学科（14.3％）で少なく、逆に、人間社会科学科（39.8％）、数学科（40.0％）、食物栄養学科（51.3％）で多かった。

このように７割が留学に関心をもつ一方、留学を躊躇させる要因がある。京都大学国際交流センターが京都大学に在籍している日本人学生を対象に 2008 年に実施した「国際交流と留学支援制度に関する調査」では、留学したいと思ったことがない人にその理由を尋ねている。これによると「あてはまる」あるいは「どちらかといえばあてはまる」を選択した割合がとくに高かった項目は、「京都大学の教育・研究への満足度とは関係なく、そもそも留学する必要を感じないから」（71.2％）、「お金が足りないから」（70.2％）、「外国語能力が不足しているから」（67.5％）、「時間が足りないから」（63.7％）、「京都大学の研究環境に満足しているから」（63.6％）であった（京都大学国際交流センター、2009）。

同様の項目について「留学を躊躇させる要因」としてお茶の水女子大学の学生に尋ねたところ（多項選択方式）、学部生では「お金が足りないから」が６割、「外国語能力が不足しているから」が 5.5 割、「時間が足りないから」が４割となった。京都大学であてはまると回答した割合の高かった「大学の教育・研究への満足度とは関係なく、そもそも留学する必要を感じないから」という項目については、お茶の水女子大学では２割が選択したのみ、「大学の研究環境に満足しているから」については１割弱が選択したのみであった。本調査で独自に含めた「留学による留年を避けたいから」という項目については３割が選択し、選択された割合が４番目に高かった。大学院生に関しては、「お金が足りないから」、「外国語能力が不足しているか

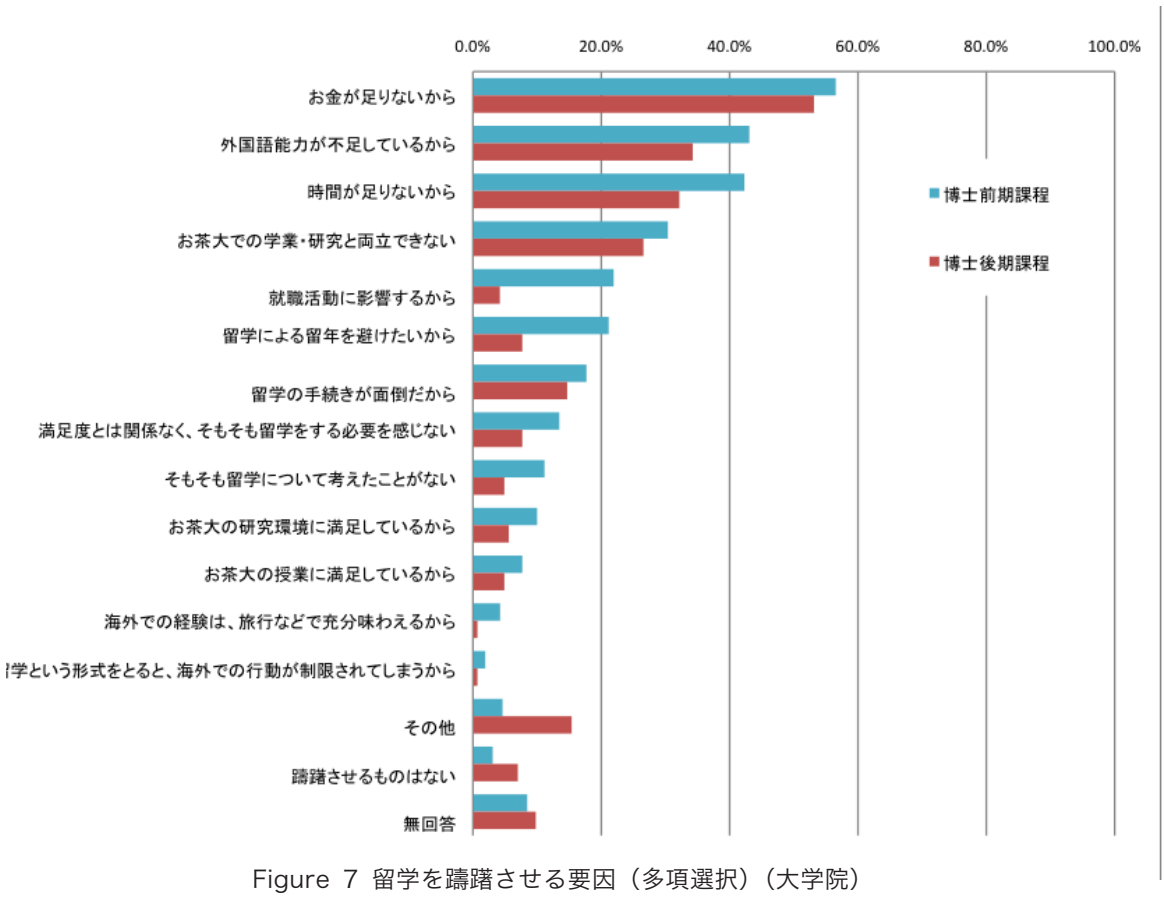


Figure 7 留学を躊躇させる要因（多項選択）（大学院）

ら」、「時間が足りないから」については学部生と同じような割合となったが、４番目に多かったのは「お茶大での学業・研究と両立できない」で３割が選択していた。

留学のための経済支援と語学力をあげるための教育支援が求められている。

## 教育と教員指導に対する評価

本章ではお茶の水女子大学の教育と教員指導に対して学生がどのように評価しているかについて見ていく。

これまで受けた授業のなかで意味があった教養教育（コア科目）と専門教育の割合を尋ねた。「全国大学生調査」における全国平均は、教養・共通教育は 4.39 割、専門教育は 5.85 割であったが、お茶の水女子大学全体の平均は教養教育（コア科目）で 5.4 割、専門教育で 7.2 割と全国平均とくらべ高めの割合であった。学年別に見ると、意味があった専門教育の割合はとくに４年生で 7.5 割と高くなっている。学部別にみると、理学部が 7.5 割と他学部にくらべ高い。学科別に見ると、芸術・表現行動学科、食物栄養学科、化学科の割合が高く、平均して８割近くの専門教育に意味があると学生が考えている。

各学年における専攻科目の履修学年配置が適切か否かの評価を学科別に見ると、人文科学科、言語文化学科、化学科、生物学科、食物栄養学科で１年生における専攻科目が少なすぎると回答している者が多い。食物栄養学科ではその一方で２、３、４年時における専攻科目が多すぎると回答している者の比率が高い。

専攻している領域において必修科目、選択必修科目、選択科目の３つのバランスが適切かどうか評価してもらったところ、多くの学科で８割が「非常に適切だと思う」または「かなり適切だと思う」と回答している。しかし、食物栄養学科、人間・環境科学科、化学科でその比率は比較的少なくなっている。バランスが悪いと回答した者に、どの点がバランスを欠いているかについて尋ねたところ、文教育学部では「必修科目が少ない」が 29.7％、理学部と生活科学部では「必修科目が多い」がそれぞれ 26.9％、23.1％と多かった。

専攻科目の難易度については、いずれの学科でも「難易度は適切と思う」と回答する割合が最も高く、平均して８割の学生がそのように考えていた。学科間でくらべると、人間・環境科学科、人間生活学科で「もっと高度な内容を学びたい」と回答する割合が２割と高く、逆に数学科で「難しすぎる」と回答する割合が高く 32.5％であった。前回調査では、生活科学部で「もっと高度な内容を学びたい」と回答する者が

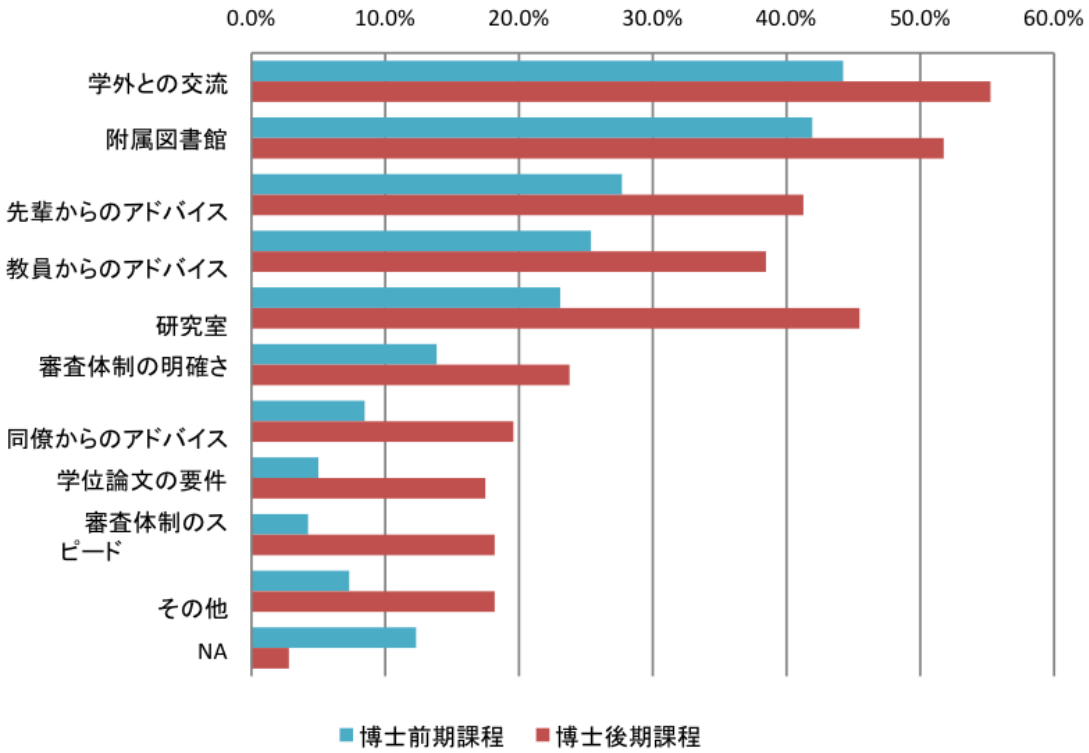


Figure 8 学位を得る上で不足に感じているもの、問題だと感じているもの（多項選択）

9.3%（無回答を除いた割合）だったが、今回調査では生活科学部平均で 17.8%まで増えている。

つぎに、大学院生からの評価を見たい。大学院生に学位を得る上で不足に感じているもの、問題だと感じているものを挙げてもらったところ、博士前期課程では学外との交流と附属図書館を 4 割が選択した。博士後期課程でも同様に学外との交流と附属図書館を 5 割が選び、さらに、研究室を 4.5 割が選択、また、先輩からのアドバイスと教員からのアドバイスもおよそ 4 割が選んだ。その他の意見として、ロッカーや個人の机の不足や利用時間の制限、PC 環境の悪さといった研究環境の問題や研究費や経済的支援の問題、博士論文取得や投稿論文提出までの筋道が分からない、教員からの指導の不足、学生同士の学術的交流の少なさ、契約している電子ジャーナルの少なさ、事務手続きの不明確さといった問題が挙がっていた。

教員指導に対する評価について、教養・共通教育（コア、LA など）の教員指導については、全学部で平均 82%が「満足」または「ある程度満足」していると回答している。専門教育の教員指導の満足度はより高く、平均して 87%が「満足」または「ある程度満足」していると回答している。とくに人間・環境科学科、人間生活学科では 9 割以上が満足しているという結果となった。大学院では博士前期課程全体で 82.7%、博士後期課程全体で 80.5%が教員指導に「満足」または「ある程度満足」と回答している。とくに、博士前期課程の人間発達科学専攻、ジェンダー社会科学専攻でその割合が高かった。

卒業論文または卒業研究の指導に対する評価を 4 年生に尋ねたところ、「非常に満足」の者が 36.2%、「やや満足」の者が 39.1%いた。学部ごとに見ると、とくに理学部で満足している者の割合が高く 8 割以上であったが、これにくらべると文教育学部では満足している割合が低くめで 7 割未満であった。

## 大学で身についたことと大学評価

本章では大学教育をとおして何が身についたと学生が考えているかについて見ていく。大学生活全体を通じて「専門分野での知識・理解」、「専門分野の基礎となるような理論的理解・知識」、「幅広い知識、もののみかた」について 7 割以上が身についたと回答している。「ものごとを分析的・批判的に考える力」、「問題をみつけ、解決方法を考える力」も 6 割以上が身についたと回答した。一方、「将来の職業に関する知識や技能」、「論理的に文章を書く力」「人にわかりやすく話す力」、「外国語の力」が身についたと回答した者は半数以下であった。以下ではこれらの項目を具体的に見ていきたい。

### a. 専門分野での知識・理解

全体としては78.4%が「かなり身についた」または「ある程度身についた」と回答しており、その割合は他の能力と比べても高い。学科別に見ると、人間・環境科学科では57.4%とその割合が若干低い。大学院では、博士前期課程で85.8%、博士後期課程で86.0%が身についたと回答しており、学部よりもその割合が高い。

b. 専門分野の基礎となるような理論的理解・知識

全体として79.8%が「かなり身についた」あるいは「ある程度身についた」と回答しており、その割合は「専門分野での知識・理解」と同様に高い。学科別に見ると、人間・環境科学科、人間生活学科、人文科学科でその割合が若干低くなっている。大学院では、博士前期課程で83.9%、博士後期課程で81.1%が身についたと回答した。

c. 幅広い知識、もののみかた

75.4%が「かなり身についた」または「ある程度身についた」と回答しており、9項目中3番目にその割合多くなっている。とくに人間社会科学科、人文科学科、人間生活学科でその割合が高い。大学院でも学部と同程度、博士前期課程で73.8%、博士後期課程で74.8%が身についたと回答していた。

d. ものごとを分析的・批判的に考える力

全体では67.6%が「かなり身についた」または「ある程度身についた」と回答している。学科別に見ると、「幅広い知識、もののみかた」と同様、人間社会科学科、人文科学科、人間生活学科で8割を超えている。大学院では博士前期課程で78.8%、博士後期課程で74.8%が身についたと回答している。専攻別に見ると、ライフサイエンス専攻で身についたと回答する者の割合が低い。

e. 問題をみつけ、解決方法を考える力

全体では62.0%が「かなり身についた」または「ある程度身についた」と回答している。食物栄養学科、人間・環境科学科でその割合が若干低い。大学院では、博士前期課程と博士後期課程でともに76.9%と学部にくらべてその割合が高い。とくに、博士前期課程の比較社会文化学専攻、博士後期課程のジェンダー学際研究専攻、人間発達科学専攻でその割合が高い。

f. 将来の職業に関する知識や技能

全体としては46.6%が「かなり身についた」または「ある程度身についた」と回答している。学科別に見ると、とくに食物栄養学科、化学科、情報科学科でその割合が高い。大学院では博士前期課程全体で61.9%、博士後期課程全体で66.4%が「かなり身についた」あるいは「ある程度身についた」と回答しており、学部よりも高い割合になっている。

g. 論理的に文章を書く力

学科による違いが大きい。人文科学科、言語文化学科、数学科、生物学科、人間生活学科で「かなり身についた」あるいは「ある程度身についた」と回答する割合が5割あるのに対し、食物栄養学科、人間・環境科学科では1.5割にとどまっている。大学院では、博士前期課程で64.3%、博士後期課程で69.2%が身についたと回答している。大学院でも専攻の差が大きく、比較社会文化学専攻でその割合が高く、ライフサイエンス専攻で低い。

h. 人にわかりやすく話す力

全体で36.7%のみが身についたと回答しており、他の項目と比べても低い割合となっている。学科別に比べると、とくに物理学科、化学科、情報科学科、食物栄養学科、人間・環境科学科でその割合が低い。大学院では、博士前期課程で65.3%、博士後期課程で66.5%が身についたと回答し、学部との差が大きい。

i. 外国語の力

身についたと回答する割合が低く、言語文化学科のみで56.4%と高い割合を示しているが、全体としては26.9%にとどまっている。大学院博士前期課程もまた学部と同様27.4%のみが身についたと回答している。これに対し、博士後期課程で41.3%が身についたと回答している。

つぎに、お茶の水女子大学の教育について、その重要度と成功度を見たい。具体的には「専門分野の理論を深く教育する」、「職業にすぐ役立つ教育をおこなう」、「専門の基礎をなす基本的知識や考え方を教育する」、「専門にこだわらない幅広い教育を行う」、「キャリア支援（卒業後の進路にむけた能力開発と指導）」という点についてである。

重要度

「職業にすぐ役立つ教育をおこなう」以外の項目について、9割以上の学生が将来のお茶大にとって重要であると回答している。「全国大学生調査」でも同様にほとんどの学生がいずれの項目も将来の大学にとって重要であると回答している。「職業にすぐ役立つ教育をおこなう」については学科で差があり、将来重要だと回答した割合は人文科学科、物理学科、生物学科、情報科学科で8割未満と低めであった。この項目については博士前期課程／後期課程ともに9割未満が重要

であると回答し、学部と差が見られた。

成功度

a. 専門分野の理論を深く教育する

「成功している」または「ある程度成功している」と回答している者の割合は全体で84.2％であるが、人間・環境科学科、人間生活学科、生物学科で比較的低くなっている。ちなみに「全国大学生調査」では平均が78.1％であるので、お茶の水女子大学はこの点について全国的にみても成功的であるように思われる。大学院生については、博士前期課程全体で82.3％、博士後期課程全体で74.8％であり、学部よりもその割合が低い。とくに、ジェンダー社会科学専攻、ジェンダー学際研究専攻でその割合が低くなっている。これは、これらの専攻が学際的であるという理由によるものとも考えられる。

b. 専門の基礎をなす基本的知識や考え方を教育する

いずれの学科でも9割の学部生が成功していると回答している。「全国大学生調査」では82.5％であり、お茶の水女子大学は全国平均を上回っている。大学院生については、博士前期課程で82.3％、博士後期課程で80.4％であり、やや低めであった。

c. 専門にこだわらない幅広い教育を行う

学部全体では81.4％が成功していると回答しているが、数学科、物理学科、食物栄養学科でその割合が低い。これらの学科では専門に力を入れていると考えられるが、一方で、幅広い教育の重要性を説く声が8～9割いることも事実である。ちなみに「全国大学生調査」では74.2％が成功していると回答しており、お茶の水女子大学は全国平均を上回っている。

d. 職業にすぐ役立つ教育をおこなう

成功していると回答している者の割合は学部全体で38.9％であり、いずれの学科でも成功していると回答する者は少なかった。これは「全国大学生調査」の62.2％と比較してもかなり低い。とくに生物学科、人文科学科、言語文化学科、人間生活学科で2～3割程度となっている。一方、大学院生については、博士前期課程で43.1％、博士後期課程で47.6％が成功していると回答している。とくに、博士前期課程のジェンダー社会科学専攻、博士後期課程のジェンダー学際研究専攻、人間発達科学専攻でその割合が高い一方で、ライフサイエンス専攻の割合は2割強と低かった。たしかに、職業にすぐ役立つ教育は将来の大学にとって「重要である」と回答した割合はほかの項目にくらべ低いが、それでも8割程度は重要であると考えており、重要性と成功度のギャップが大きくなっている。

e. キャリア支援

成功度と重要度のギャップが最も大きい。成功度については化学科のみ8割が成功していると回答しているが、その他の学科では5～6割程度である。大学院生については、博士前期課程で42.3％、博士後期課程で39.9％が成功していると回答しており、学部生よりも成功していると考えている者の比率が低かった。

## お茶大の教育環境

つぎに大学のハード面に対する評価について見たい。お茶の水女子大学の教育環境について、改善すべき点について聞いたところ、学部生では図書館の蔵書数、教室の冷暖房、教室の備品類（黒板、マイク、机類など）、ロッカー室を4割以上、教室の情報機器、学内PC、学部講座図書館、生協を3割以上が選択した。また、大学院生では、図書館の蔵書数（5割以上）、教室の冷暖房、院生室を4割以上、教室の備品類、学内PC、無線／有線LAN、図書館の蔵書数、学生室、学部講座図書館、図書館の電子ジャーナルサービス、生協を3割以上が選択していた。

学部／専攻別に見ると、図書館の蔵書数については、とりわけ比較社会文化学専攻、人間発達科学専攻、ジェンダー社会科学専攻、ライフサイエンス専攻の学生のうち6～7割が不満をもっていた。教室の冷暖房の項目については学部間で差があり、文教育学部では51.0％が冷暖房に不備があると回答している。院生室については、とくに比較社会文化学専攻、人間発達科学専攻の院生のうちそれぞれ50.0％、69.8％が改善を望んでいる。

お茶の水女子大学の授業以外の教育サービスに対する満足度については、学部生では、シラバス、履修ガイド、開講科目冊子、時間割冊子、OchaMailについては、「非常に満足」または「やや満足」と回答した者が7割、図書館のレファレンスサービス、情報機器の利用、メールシステム、オフィスアワーの設置や教員の対応については5割以上と高い。一方、不満度が高かったのは、事務窓口の対応で4割がこれを選択した。「利用したことがない」という回答が多かったのは情報教室、オフィスアワーであった。

大学院生については、シラバス、履修ガイド、開講科目冊子、時間割冊子、図書館の開館日／時間、

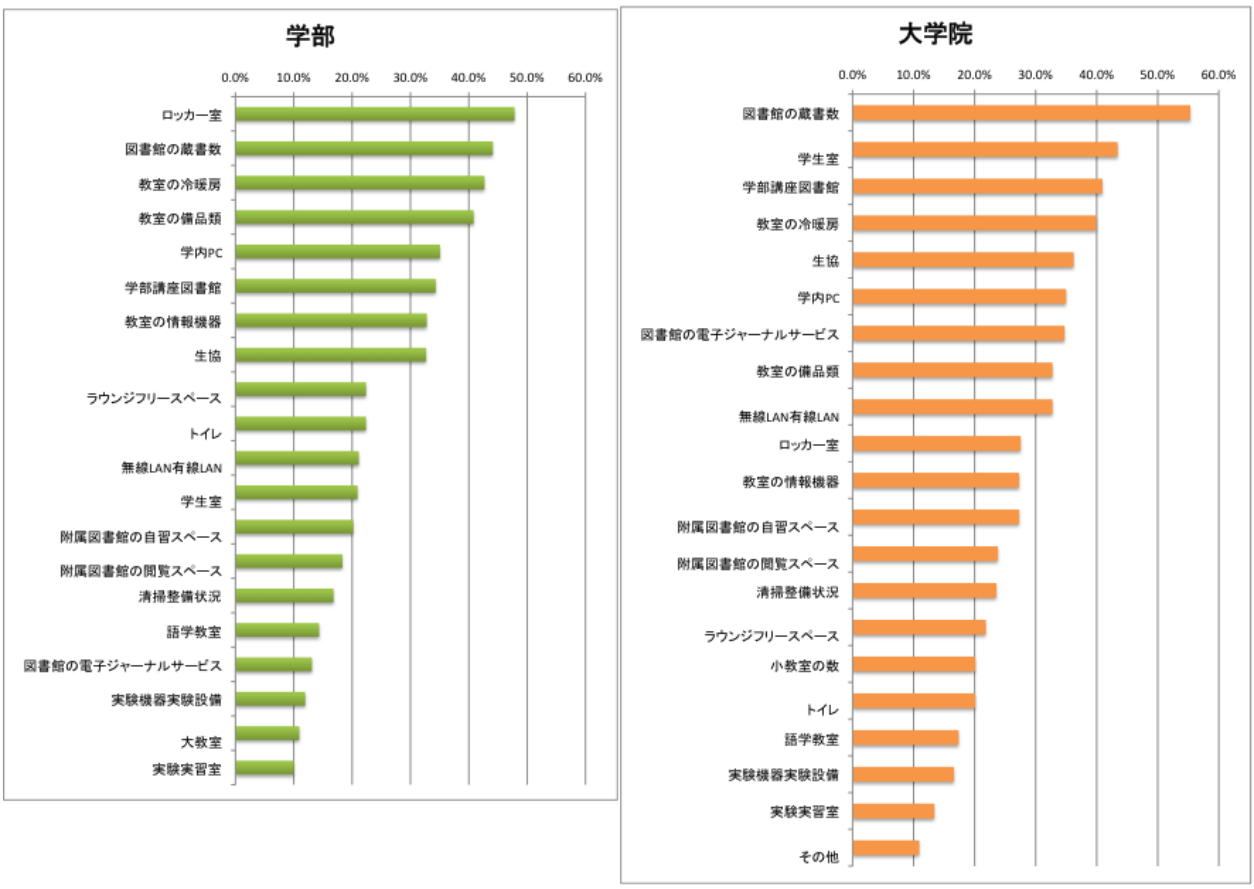


Figure 9 改善すべき点（10%以上）（多項選択）

図書館のレファレンスサービス、メールシステム、OchaMail、オフィスアワーの設置、教員の対応は５割以上が「非常に満足」または「やや満足」と回答した。一方、不満度が高かったのは、情報機器の利用方式（アカウント、使用時間、プリンタ使用法など）、図書館の開館日／時間、メールシステム、事務窓口の対応が４割以上であった。とりわけ事務窓口の対応については５割の学生が「非常に不満」または「やや不満」と回答している。図書館の開館日／時間、メールシステムの評価は割れているようである。「利用したことがない」と回答した者が多かったのは、図書館のレファレンスサービス、教員のオフィスアワー、情報教室、情報機器であった。

学生は大学からの情報はどのように得ているだろうか。学部生では友人と OchaMail を７割以上が選択している。お茶大 HP、ポータルサイト、教員、学生向けメール、掲示板を４－５割の学生が選択している。これに対し、院生の情報源は OchaMail が７割、教員、友人、お茶大 HP を６割が選択しているが、学生向けメール、掲示板は３割、ポータルサイトは１割と大学院生の情報源がとくにかぎられているようである。

先に見たように、お茶の水女子大学の学生のおよそ７割が留学に関心をもっているが、「留学を躊躇させる要因」として「外国語能力が不足しているから」という回答を 5.5 割の学生が選択していた。実際、大学で「外国語の力」が身についたと回答する割合が低く全体で 26.9% にとどまっていた。このような状況を打破する一つの方策は外国語の自主的な勉強であるが、その一環として外国語の自習教室である CALL 教室、MMLL 教室、学生センター１階情報サービス室、情報処理教室、図書館が現在、どの程度利用されているかを見よう。学部生の外国語の自習教室利用状況について、「毎週２回以上」または「毎週１回程度」利用している者は 28.0％であり、「利用したことがない」または「年に数回あるいはそれ以下」と回答した学生は 52.9％と過半数もいた。学年別・学部別に見ると４年生と理学部で「利用したことがない」または「年に数回あるいはそれ以下」の割合が高く６割以上であった。大学院生の外国語の自習教室利用状況については、18.1％が毎週２回以上または毎週１回程度と回答しており、学部生と比較すると１割ほど少ない。とくに、ライフサイエンス専攻、理学専攻で「利用したことがない」または「年に数回あるいはそれ以下」の割合が７割以上であった。

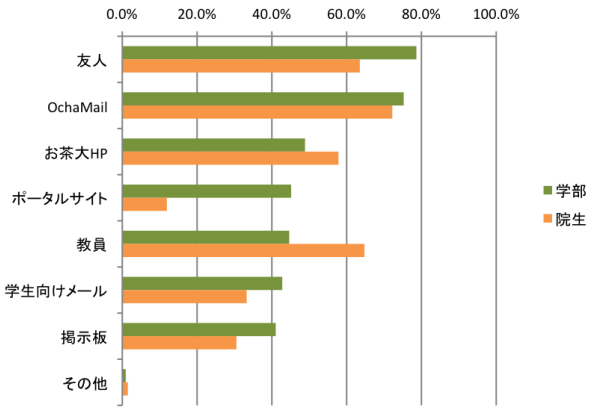


Figure10 大学からの情報を得ているところ（多項選択）

お茶の水女子大学の学生にとって「外国語の力」を身につけることを重要な課題と考えるならば、外国語の自習教室の周知や改善点を探るとともに、学生の外国語能力を高めるその他の方策を考えることも必要であろう。

## 学生の悩みと支援活動

お茶の水女子大学の学生はどのような悩みや不安を抱えているだろうか。「全国大学生調査」と「ベネッセ調査」の結果と比較しながら見ていく。本章では「全国大学生調査」では、「よくある」あるいは「ときどきある」と回答した者が過半数であった項目は「生活に熱意がわかない」（56.2%）、「授業に興味・関心がわかない」（61.8%）、「進級や卒業ができるか心配だ」（53.3%）の３つであった。この３つの項目についてお茶の水女子大学の学生はどのように考えているだろうか。まず、「生活に熱意がわかない」学生は学部・大学院ともに５割おり、とくに２年生でその割合が高くなっている。「授業に興味･関心がわかない」は「全国大学生調査」よりも低いものの 53%がそのように考えている。この項目も２年生でさらに高い割合となる。「進級や卒業ができるか心配だ」については、約４割がそのように考えており「全国大学生調査」よりも低い割合であったが、大学院博士後期課程ではその割合が高かった（55%）。

つぎに「全国大学生調査」で「友達のことで悩みがある」（42.6%）、「授業の内容についていっていない」（49.4%）、「やりたいことが見つからない」（46.4%）が４割強の回答があった項目について見ていく。お茶の水女子大学では「友達のことで悩みがある」と回答する者は学部平均で 34.8%と低めであった。しかし、この項目についても２年生でその割合が若干高くなっている。「授業の内容についていっていない」も２年生でその割合が高く、６割近くがそのように考えている。先でも見たように、２年生で授業や生活についての不安が大きくなる傾向が見られる。学部別に見ると、理学部が突出してその割合が高い。「やりたいことが見つからない」の学部平均は 44.1%であり、「全国大学生調査」同程度の結果であった。このほか、「教員のことで悩みがある」と回答した者はとくに大学院生で多く、博士前期課程で 36.5%、博士後期課程で 47.6%いた。教員と大学院生の距離が学部生よりも近くなるため、悩みも発生しやすくなると考えらえる。

「他の学部や学科・コースに移りたい」、「他の大学や学校に入り直したい」は「ベネッセ調査」よりも低く、お茶の水女子大学では２割程度であった。

「経済的に勉強を続けることが難しい」については、大学院で顕著にその割合が高く、博士前期課程で 23.5%、とくに博士後期課程で 53.2%と過半数であった。

「就職活動が思い通りにいかない」は「全国大学生調査」では 24.3%であったが、お茶の水女子大学では学部平均 31.2%、大学院平均 47.6%と高い割合となった。とくに就職活動中の３年生で 54.9%がそのように考えていた。

つぎに、学生の経済状況とアルバイト、奨学金の受給状況について見たい。授業料をどのように支払っているかを見ると、学部と大学院博士前期課程では親・保証人がすべて支払っているケースが多い。「全国大学生調査」によれば、授業料を両親等が払っている割合の平均が 8.5 割、奨学金が 1.4 割、アルバイト・給与が 0.4 割、その他が 0.2 割であった。これに比べると、お茶の水女子大学の学生は親・保証人が授業料を払っている割合が比較的高い。一方、大学院博士後期課程の学生は、親・保証人が支払っているほか、奨学金やアルバイト・給与でもまかなっているケースも多い。

お茶の水女子大学の学生はどのくらいアルバイトをしているだろうか。学部生・大学院生のうち平均６割がアルバイトを調査時点でおこなっていた。今後アルバイトをしようと考えている者を含めると、学部生の８割以上、大学院生の７割がアルバイトに対し何らかの必要性を感じている。アルバイトを現在している者について、アルバイトの週あたりの平均日数は学部・大学院ともに 2.5 日、平均時間は学部で 10.9 時間、大学院で 11.1 時間であった。とくに博士後期課程の

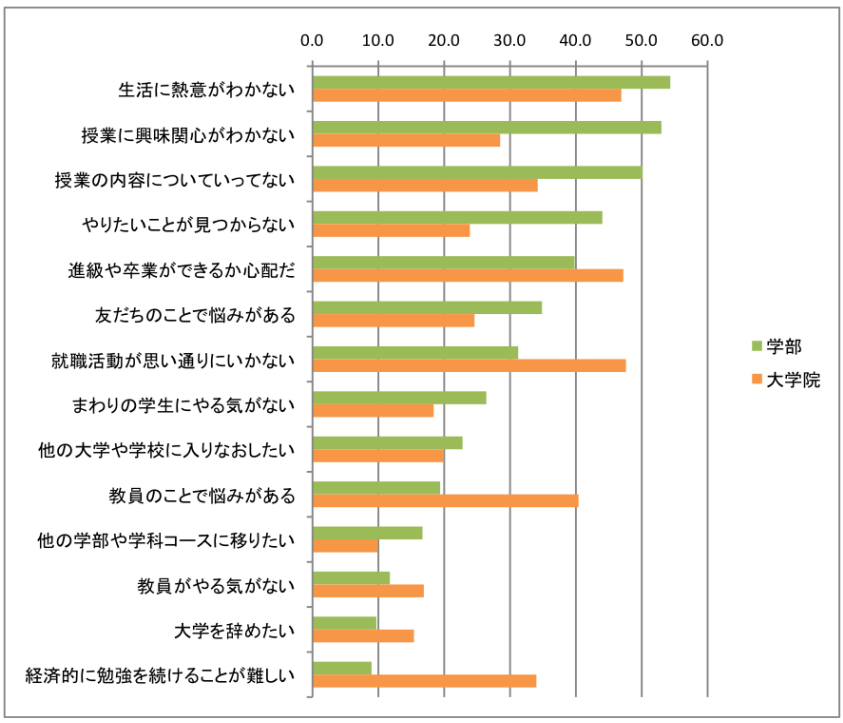


Figure 11 悩みや不安（「よくある」＋「ときどきある」の合計）

学生の平均日数が週 2.7 日、平均時間が週 12.6 時間と比較的多い。ベネッセの「大学生の学習・生活実態調査」では週あたりの平均時間が 14.3 時間であったが、これに比べるとお茶の水女子大学の学生のアルバイト時間は比較的少ない。

つぎに奨学金はどの程度の学生が受給しているだろうか。日本学生支援機構の奨学金を受給している学部生は３割未満、大学院生は半数近くである。奨学金の情報は大学からの書類や学生支援チームの掲示から得る者が多い。

最後に、学生が、お茶の水女子大学の学生支援活動についてどのように考えているかを見たい。

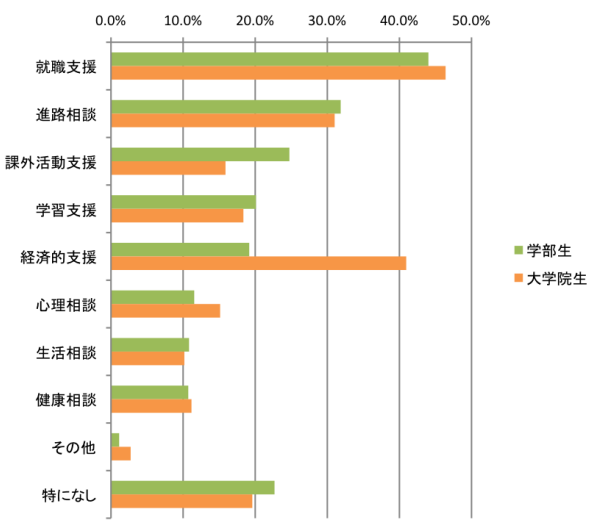


Figure 12 学生支援活動で足りないところ（多項選択）

Figure12 を見ると、とくに就職支援、そして進路相談の比率が高いことが分かる。就職支援は学部２～４年生と博士前期・後期課程の学生の４割が選択していた。先にも大学が提供するキャリア支援の成功度と重要度はギャップが最も大きい項目であると指摘した。やはり就職支援・進路相談を充実させる必要がありそうである。経済的支援については博士後期課程の学生が約６割、博士前期課程の学生が約３割選択していた。

## お茶の水女子大学の今後の課題

最後、以上の結果を再度確認することは省き、お茶の水女子大学の今後の課題をいくつか挙げ結語としたい。

第１に、キャリア支援、就職支援の充足が課題である。「就職活動が思い通りにいかない」と考えている学生は多く、とくに就職活動中の３年生で 54.9％がそのように考えていた。また、大学院生でもその割合は多かった。その一方、誰にも進路相談をしたことがない学生の割合も多い。実際、就職支援、進路相談の欠如を指摘する者が多い。この声に応えていく必要があろう。

第２の課題は、外国語習得と留学への支援である。７割近くの学生が何かしら留学に関心をもっている一方で、「外国語能力が不足しているから」留学を躊躇

すると回答する者が5割いる。外国語能力はどのように高めればよいのか。お茶の水女子大学には外国語の自習教室があるが、それを利用している割合は低い。自習教室の周知や授業の改善、あるいは外国語習得のための全く別の方法を考える必要もあるかもしれない。その他、留学を促進するためには、経済的な支援や、留学とお茶の水女子大学の学業・研究との両立をはかる方策が求められている。

第3に、各学科における専攻科目や教員指導の再検討はつねに必要である。履修学年配置や、必修科目、選択必修科目、選択科目の3つのバランス、難易度について、学生の評価は割れているものの、全く問題がないわけではない。学生迎合的な専攻科目を用意したり教育指導したりするということではなく、学部、学科、コース／講座内でつねに内省する機会を設ける必要はあろう。

第4に、ハード面について、とくに図書館、教室、PC・ウェブ環境、ロッカー室、院生室、事務の改善が必要であろう。図書館は大学院生が学位を得る上で不足／問題に感じているものとして挙げられ、また、改善すべき施設として学部生、大学院生の多くが指摘している。また、事務の対応について、半数の学生が問題として考えている。事務の対応に対する不満はおそらく部分的には情報提供方法の問題と関連している。学生が大学から情報を得る上で利用されているOchaMailは大学の正規な情報源であるが、この利用が8割弱、その他の正規な情報源であるポータルサイトや大学ＨＰは半数程度しか利用していない。ポータルサイトについては大学院生では1割程度しか利用されていない。情報の適切な提供は学生にとっても大学の事務組織にとっても有益であろう。

第5に、学生の学習とそのサポートが必要である。たしかに、お茶の水女子大学の学生は自主性を重んじ、広く学びたいと考え、チャレンジングな授業を求める者も多い。一方、授業以外の勉強時間は決して多くなく、読書量も多くはない。この点で、学生には自主的な勉強が欠けているように見える。また、学部生では「生活に熱意がわかない」、「授業に興味・関心がわかない」、「授業の内容についていっていない」が5割、大学院生では「生活に熱意がわかない」、「進級や卒業ができるか心配だ」が4.5割おり、授業や進級、大学生活に困難を抱えている者も多い。自主的な学習を促進し、学生生活をサポートすることが求められる。

## 注

*1 前回調査は2007（平成19）年度、前々回調査は2005（平成17）年度に実施されている。

*2 お茶の水女子大学教育開発センターで運営しているPloneについての詳細は石田（2011）を参照のこと。

*3 報告書はお茶の水女子大学TeaPotからもPDFの形式でダウンロードできる。参照されたい。http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/handle/10083/50744

## 参考文献

ベネッセ教育研究開発センター（2009）『大学生の学習・生活実態調査報告書』研究所報51.

石田千晃（2011）「ICTを活用した学習支援の意義――Ploneを使った実践と運用を例に」『高等教育と学生支援――お茶の水女子大学教育機構紀要』1, 1-18.

京都大学国際交流センター（2009）『京都大学における国際交流の現状と発展に向けての問題提起――第3回アンケート・インタビュー調査報告書』.

お茶の水女子大学（2007）『平成17年度お茶の水女子大学学生による教育・生活に関する意識調査報告書』.

お茶の水女子大学（2008）『お茶の水女子大学の教育に関する意識調査報告ーー平成19年度ーー集計結果(速報版)』

お茶の水女子大学（2011）『平成22年度お茶大生の学習環境と生活・意識に関する調査』.

東京大学大学経営・政策研究センター（n.d.）「全国大学生調査」http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/cat77/cat82/

2012年3月5日 受稿
教育機構実施調査により受理